

令和6年度

第3回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和6年12月4日（木） 13:00～15:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問1名
杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）
丹後「子育て」サポート協議会委員3名
多々納智（京都府宮津天橋高等学校 教諭）
関奈央弥（合同会社 tangobar 代表社員）
櫛田 啓（社会福祉法人みねやま福祉会 常務理事）
各市町教育委員会担当者
事務局（丹後教育局）



4 協議「高校生意識調査アンケートの結果をもとに考える丹後の『子育て』関係者の協働を生むための協議会メッセージについて」

ア 高校生意識調査アンケートの結果から

① 主体性や主権者意識の醸成

- ・「地域に働きかけた結果、どうなったか」「自分の行動で周囲がどう動いたのか」といった活動を通して感じたことが今後の社会参画意欲につながっていくと考え、高校での探究活動はその意欲を担保している。
- ・ルールメイキング等、自分の意見が反映される場面をどれだけ設定できるかが重要である。その一方で、子どもに委ねることに抵抗を感じる大人の存在も課題である。
- ・丹後の子どもたちは「一人の一步から周りが動く」という意識が低いのではない。今後、「一人の一步から状況は変わっていく」という意識を与えることで違った結果になっていくのではない。

② 丹後での生活

- ・丹後が好きだけど、住みたくない、働きたくない、でもできるだけ関わりたいという傾向について、丹後に住むことへの不安があるのではない。
- ・丹後での仕事にやりがい等を感じてもらえる機会がまだまだ少ない。もっと丹後の企業が夢や希望をもって発信し、学生と関わっていくことが求められる。

③ 大人が植え付けてしまっている意識

- ・子どもが「叱られ続けたことで成長した」と認識している場合があるが、厳しさが成長の要因ではなく、元々子ども自身に成長する力が備わっていたから成長できたという認識が正しい。大人の役割は内発的動機付けのための環境を整えることである。

イ 丹後の『子育て』関係者の協働を生むための協議会メッセージについて

① 事務局から

- ・今の大人たちの価値観を変えていく言葉集めをしていきたい。
- ・子どもが本来もっている力を引き出すための接し方を大人（保護者や先生）に意識付けるための心に響くメッセージを考えたい。
- ・大人目線のメッセージと子ども目線のメッセージという視点で考えたい。

② メッセージ案

・「子どものもっている力を信じて！」（大人目線）

中学生と乳児との交流事業に関わって、大人が口を出さずとも適切にコミュニケーションを取り、活躍する中学生の姿があった。大人は「子ども」と思っている、子どもは素晴らしい力を発揮する。

・「子どもの声を引き出そう、耳を傾けよう」（大人目線）

子どもたちは、一人にさせられ、「一人でする」を求められすぎではないか。孤独感を与えず、様々な人と関わる体験ができる環境を整えてやりたい。

・「大人も子どもも共に育つ」「肩を並べて歩こう」「一緒に未来を作ろう」=いろいろな人が高さを合わせたスクラム組んでいるイメージ（大人・子ども目線）

イメージとして「大人とこどもは対等」ということ、大人も不完全なのだということ、お互いがそばにいることを伝えたい。また、地域づくりには、子どもの力が必要となることも意識させたい。

・「黙っとれ」「すぐにダメダメって言うの、やめて」「『よし、やれやれ（せえや、してみいや』って言って」（子ども目線）

親にはしゃべり過ぎず、子どもの発言を待ったり、意欲を尊重したりする意識が必要である。

・「私も一人の人間なんだよ」（子ども目線）

ポーランドの医師であり、子どもの権利条約の父と呼ばれるヤヌシュ・コルチャックは「子どもは既に人間」「…大人は子どもによりよき人生への憧れを与えることができる。」と今から80年ほど前に既に述べている。

・「決めるのは子どもなんだよ」（大人・子ども目線）

自己決定するのは子どもであり、選択する権利は子どもにある。そのためのサポートを大人がする。その具体的な役割として「対等に、寄り添い、信じ、相談を受ける。そして、時には待ち、勇気づけ、素敵な姿を魅せる」ということがあるのではないかな。

・「未来は子どもたちのもの。そのために私たち大人が果たす責任がある。」（大人目線）

この責任とは、子どもがもっている力を発揮する場と機会をつくることであり、大人に「主役は親ではなく、子どもなのだ」ということに気付かせたい。

・「親も子育て1年生」（大人目線）

失敗はみんなで共有し、子育てに生かせばいい。親に寄り添い、「親育ち」を応援するメッセージも必要ではないか。子どもに責任を押し付けることもなく、親も自分のありのままを受け止められるような視点でありたい。

5 指導助言（杉岡顧問）

ア アンケートについて

- ・ 3年分のアンケートから見えてくるものに極端な発見はなかったように感じるが、「丹後が好き」というだけで「丹後に住みたい、働きたい」という項目が高くないことには注視したい。
- ・ 地元への愛着に対する高校生の意識について、丹後の高校生は高水準を維持している。これは、丹後管内各高校での探究活動の影響が大きい。丹後には、豊かなヒト・モノ・コトがあり、それらを支える人財の存在も大きい。
- ・ この探究活動の渦を小・中学校に広げていくことができるのではないか。今、探究活動を通して変わろうとする中学校が増えている印象がある。

イ メッセージについて

- ・ 私たちが見られない 22 世紀を、今の子どもたちは見ることができるかもしれない。まとめのアイデアとして、そんな子どもたちに向けた丹後らしい叙情詩にするのもよい。

ウ 協議を要約した叙情詩型メッセージ案

『22 世紀を生きる子どもたちへ』

子どもが変わる唯一の方法は大人が変わること
カッコいい大人の背中が子供たちに選択肢を与える
思わず憧れる機会を ちゃんと憧れる機会を



親は木の上に立って見るもの だまって見守ろう
失敗は子どもの特権 大人も失敗するもの
見守る勇気が才能を育む

人生の主役は子どもたち自身 親の持ち物ではない
子どもも人間 親も人間 子育ては親そだち

子どもの自立記念日は気づき記念日
みんな違ってみんなよし

子どもは未来からの贈り物
子どもたちが未来を正しく選択できるよう
丹後で本気で応援する子どもを
丹後で本気で頑張る大人を



エ まとめ

- ・ビジネス界のキーワードに「自営型」があり、全体の 10%、組織に属する「メンバーシップ型」は 90%という割合である。今、自営する大人（個人事業主、フリーランス）が減っている。大人が就労する姿を家庭では子どもに見せにくい。
- ・丹後の豊かな環境の中であれば、自分で挑戦するスタイルを選び、サラリーマンにならない選択肢も多くあっていいのではないかな。
- ・大人も子どもも言葉を寄せる参加型にしてパズルを編集するようにメッセージを完成させていく協議会であってもよいのではないかな。自分の言葉が入っていれば、当事者意識の向上へとつながる。

